

愛媛県

(愛媛県農林水産部農業振興局農産園芸課 山本智樹)

1. 新病害虫の発生

(1) ビワキジラミ(令和3年3月17日特殊報)

徳島県・香川県境のビワ樹を中心に黄色粘着トラップを設置・調査していたところ、令和3年2月下旬に本種とみられるキジラミ成虫が誘殺された。愛媛県果樹研究センターにおいて、遺伝子診断によってビワキジラミであることが確認され、愛媛県における初確認となった。

(2) サツマイモ基腐病(令和3年7月28日特殊報)

令和3年7月、松山市内の2圃場において、茎葉部の黄化や茎地際部の黒変症状を示す株が確認された。農研機構に診断を依頼した結果、本県では未発生のサツマイモ基腐病と同定された。これを受け、7月21日までに周辺圃場を調査した結果、同様の症状を示す被害は確認されていない。

2. 水稻

(1) 葉いもち

早期栽培では、山間部で5月下旬に初発を確認し、その後の天候不順により発生が助長された。普通期栽培では、6月中旬の田植え後間もない時期から発生が確認され、7月中下旬にかけ増加傾向となり、8月中旬からの多雨でさらに発生が助長された。発生量は早期栽培でやや多、普通期栽培で多となった。(令和3年8月5日：注意報)

(2) 穂いもち

早期栽培では、例年発生がみられない平坦部でも発生が認められた。普通期栽培では、8月下旬出穂の中生品種で多発した。罹病性品種のキヌヒカリでは発病穂率が50%を超える圃場もみられた。発生量は早期栽培でやや多、普通期栽培で多であった。(令和3年8月5日：注意報)

(3) 紋枯病

早期栽培での発生時期は6月上旬と平年並で、病勢進展はやや緩慢であった。普通期栽培での発生時期は平年並で、少発生で推移した。出穂期以降に上位進展し、一部で株全体が枯れる発病度の高い圃場もみられた。発生量は早期で並、普通期栽培でやや多であった。

(4) 稲こうじ病

早期栽培では発生は認められなかった。普通期栽培では8月中旬(幼穂分化期～穂孕み期頃)と9

月中旬の連続降雨により発病が助長された。発生量はやや多であった。

(5) セジロウンカ

予察灯での誘殺は6～7月にかけて少なかった。本田での発生は、早期栽培、普通期栽培ともに少ない傾向が続き、発生量は早期栽培、普通期栽培ともにやや少であった。

(6) トビイロウンカ

予察灯での誘殺確認前の7月下旬に、本田で初発を確認した。圃場での発生密度は低く、広域調査での発生圃場率は、8月、9月調査とも低く、その後も発生は少なく推移し、坪枯被害は認められなかった。発生量は早期栽培で並、普通期栽培でやや少であった。

(7) コブノメイガ

早期栽培では7月上旬から、普通期栽培では7月下旬頃から第一世代幼虫による被害が確認されたが、被害葉は少なかった。発生量は早期栽培、普通期栽培ともに少であった。

(8) 斑点米カメムシ類

6月の畦畔雑草および早期栽培圃場での発生密度はやや少なかった。7月は早期、普通期栽培とも、圃場での発生は平年並であったが、畦畔雑草での発生密度と発生地点率はやや高かった。8月以降は畦畔雑草、本田ともに発生密度の増加は認められず、発生量は早期栽培、普通期栽培ともやや少であった。なお、近年イネカメムシが増加している。(令和3年7月30日：注意報)

2. 麦

(1) 赤かび病

裸麦では4月中旬頃から散見されたが、主要産地の広域調査では、発生はやや少ない傾向であった。収穫前、5月上中旬以降に発生が増加した。小麦でも5月上旬まで発生は認められなかったが、収穫前にかけて増加した。発生量は平年並であった。

3. 大豆

(1) ハスモンヨトウ

7月中旬頃から食害葉が散見され始めたが、被害は多くなかった。9月中旬以降に一部の圃場で被害

葉が増加した。発生量は平年並であった。

4. 果樹

(1) カンキツ・黒点病

6月から発病が認められた。7月の発病果率は平年並であったが、8月以降に増加し、9月まで多発生で推移した。一部園地の極早生を中心とした品種で黒点病が要因と考えられる緑斑が発生し問題となった。発生量は多であった。

(2) カンキツ・かいよう病

2月に行った越冬病斑調査では、発病度及び発生圃場率ともに平年並であった。5～7月の新梢での発生は平年並～やや少で推移したが、8月以降は一部で多発園地が認められた。発生量はやや多であった。

(3) カンキツ・ミカンハダニ

越冬虫数は平年より少なく、6月まで発生量は少なく推移した。7～8月に発生ピークとなり、一部で多発園地もみられたが、平年と比較すると寄生葉率、葉あたり雌成虫数とも少なかった。発生量は少であった。

(4) カンキツ・ゴマダラカミキリ

平年並みの6月に県内各地で成虫を確認した。一部で発生が多い園地がみられたが、発生量は平年並であった。

(5) かき・炭疽病

結果母枝の越冬病斑発生圃地率はやや低く、新梢及び果実での発病は7月までは平年並で推移したが、8月以降に果実での発病が増加した。発生量は多であった。

(6) かき・角斑落葉病

8月までは平年並の発生であったが、秋季に一部で多発園地が認められた。発生量はやや多であった。

(7) キウイフルーツ・かいよう病

3月から一部の園地で樹液の漏出が認められた。発芽期から開花期にかけての多雨により、一部で多発園地が認められ、前年よりも発生が多くなった。

(8) 果樹共通・果樹カメムシ類

越冬密度及び越冬成虫確認地点率は平年より低く、春季の落葉果樹類での被害も少なかった。夏季の発生は少なく推移したが、9月以降に広域のカンキツ及びカキ園で飛来が認められ、果実での被害

が発生した。発生量は多であった。(令和3年10月6日：注意報)

5. 野菜

(1) 冬春トマト・タバココナジラミ

10月から発生が認められ、期間を通して発生した。寄生株率は、10月は平年並であったが、11月には増加し、1月にかけて多く推移した。2月以降も概ねやや多く発生し、発生量は多であった。

(2) 夏秋トマト・灰色かび病

6月から茎葉で発生が認められ、期間を通して発生した。発病株率は6～7月は概ねやや多く推移したが、8月以降に増加し、ゴーストスポットの発生も多く見られた。発生量は多であった。

(3) 夏秋トマト・タバココナジラミ

調査の中では栽培期間を通して発生は認められず、発生量は少であった。

(4) 冬春ナス・アザミウマ類

ミナミキイロアザミウマは2月から発生が認められ、気温が高く推移したため、4月にかけて発生量が増加したものの、5月には平年並の発生となった。発生量はやや多であった。

(5) 夏秋ナス・ハダニ類

期間を通して発生が認められた。寄生葉率は、6～7月は平年並であったがその後に増加し、8月はやや多、9月は多となった。発生量はやや多であった。

(6) 冬春きゅうり・べと病

抑制栽培では、11月頃から発生が認められ、発病葉率は12月から増加した。促成栽培では、12月から発生が認められ、発病葉率は3～4月に平年より高く推移した。半促成栽培では、4月から発生が認められ、平年並で推移した。発生量は多であった。

(7) 冬春きゅうり・褐斑病

抑制栽培では、10月から発生が認められ、発病葉率は高く推移した。促成栽培、半促成栽培では発生は認められなかった。発生量はやや多であった。

(8) 夏秋きゅうり・べと病

6月から発生が認められ、発病葉率は7月から高まって8月にピークとなり、その後も多発傾向で推移した。期間全体での発生量は多であった。

(9) 夏秋きゅうり・褐斑病

発生は認められず、発生量は少であった。

(10) 夏秋きゅうり・アブラムシ類

6月から発生が認められ、7月に最も多くなり、1葉当たりの寄生虫数も多くなったが、8月は発生が認められなかった。期間全体での発生量はやや多であった。

(11)夏秋きゅうり・アザミウマ類

ミナミキイロアザミウマは、6月から発生が認められた。1葉当たり寄生虫数は当初から少なく推移し、発生量はやや少であった。

(12)春キャベツ・菌核病

平年より遅い3月から発生が認められた。4月の多雨により発生が助長され、発生量は多であった。

(13)春キャベツ・アブラムシ類

定植後から発生が認められ、2月までは平年並みの発生であった。3月に寄生株率が平年の3倍となったが、実害を生じるほどではなかった。発生量は多であった。

(14)タマネギ・白色疫病

早どり栽培では2月にわずかに発生が認められた。普通期栽培では発生は認められなかった。発生量は少であった。

(15)タマネギ・べと病

暖冬により一次感染が助長され、2月から発生が認められた。3月上中旬の普通期栽培では、発生圃

場率、平均発病株率とも平年より高く推移した。発生量は多であった。

(16)サトイモ・ハスモンヨトウ

6月から寄生が認められた。8月は一時的に密度が低下して少発生となったが、9月の食害面積率はやや高くなった。期間全体での発生量は平年並であった。

(17)冬春イチゴ・ハスモンヨトウ

育苗期の発病株率は平年に比べて高かった。本圃では、10月の発病株率が平年よりやや高く、期間全体での発生量はやや多であった。(令和3年9月3日：注意報)

(18)冬春イチゴ・アザミウマ類

10月から花房への寄生が認められ、期間を通じて発生した。1花当たりの寄生虫数は、2月までは少なく推移したが、3月には並、4月には多くなった。発生量はやや多であった。

(19)冬春イチゴ・ハダニ類

期間を通して発生が認められ、寄生株率は5月に最も高くなった。他の月は並～やや多で推移した。発生量はやや多であった。(令和3年10月29日：注意報)

令和3年度 主要病害虫発生状況(愛媛県)

単位: ha

作物名 (作付面積) 病害虫名	発生面積	摘 要	作物名 (作付面積) 病害虫名	発生面積	摘 要
早期水稻 (2,902)			カキ (595)		
いもち病 (葉いもち)	800	やや多	炭疽病	363	多
いもち病 (穂いもち)	650	やや多	うどんこ病	462	多
紋枯病	2,200	並	カキノヘタムシガ	131	並
ごま葉枯病	230	並	果樹共通 (-)		
イネミズゾウムシ	2,000	多	果樹カメムシ類	-	多
コブノメイガ	120	少	冬春トマト (32)		
セジロウンカ	1,500	やや少	灰色かび病	6	並
ツマグロヨコバイ	900	やや少	葉かび病	10	やや多
ニカメイガ	50	並	タバココナジラミ (全タイプ)	12	多
斑点米カメムシ類	1,900	やや少	夏秋トマト (112)		
ヒメトビウンカ	1,700	並	灰色かび病	70	多
イチモンジセセリ	150	やや少	葉かび病	1	並
普通期水稻 (10,498)			かいよう病	2	やや少
いもち病 (葉いもち)	8,420	多	タバココナジラミ (全タイプ)	0	少
いもち病 (穂いもち)	5,470	多	オンシツコナジラミ	40	多
紋枯病	8,390	やや多	冬春ナス (10)		
稲こうじ病	1,550	やや多	うどんこ病	6	やや多
ごま葉枯病	3,210	やや多	アザミウマ類	6	やや多
イネミズゾウムシ	1,010	並	夏秋ナス (137)		
コブノメイガ	850	少	うどんこ病	70	やや多
セジロウンカ	4,400	やや少	アブラムシ類	39	やや少
ツマグロヨコバイ	2,500	やや少	アザミウマ類	80	やや少
トビイロウンカ	400	やや少	冬春キュウリ (34)		
斑点米カメムシ類	6,100	やや少	べと病	28	多
ヒメトビウンカ	4,100	やや少	うどんこ病	11	やや少
ニカメイガ	350	やや少	ミナミキイロアザミウマ	17	やや多
イチモンジセセリ	550	やや少	夏秋キュウリ (194)		
麦 (2,014)			べと病	97	多
赤かび病	225	並	うどんこ病	19	少
うどんこ病	190	並	アブラムシ類	58	やや多
裸黒穂病 (黒穂病類)	450	やや多	アザミウマ類	48	やや少
大豆 (338)			春キャベツ (132)		
ハスモンヨトウ	250	並	菌核病	53	多
吸実性カメムシ類	45	やや少	アブラムシ類	53	多
カンキツ (11,680)			タマネギ (322)		
そうか病	523	やや多	白色疫病	1	少
黒点病	11,680	多	べと病	87	多
かいよう病	2,183	やや多	冬春イチゴ (81)		
ヤノネカイガラムシ	766	やや少	うどんこ病	12	やや少
ミカンハダニ	9,733	少	炭疽病	11	やや多
アブラムシ類	8,760	やや多	灰色かび病	11	並
ゴマダラカミキリ	1,363	並	ハダニ類	40	やや多